

藤井 秀登 著

『現代交通論の系譜と構造』

(税務経理協会、2012年2月)

庭田 文近

社会科学における交通研究は、大学の商学部や経済学部、経営学部を中心に、交通論や交通経済学といった名称で行われてきており、主として経済理論の応用分析として位置づけられてきた。そのため、他の経済学の領域と同様に交通論・交通経済学も、マルクス経済学からのアプローチと、近代経済学（ないしは非マルクス経済学）からのアプローチの2つの流れが並存し、論争が行われてきた。近年では、社会主義体制の崩壊に伴い、交通研究でも近代経済学のアプローチが主流となっているが、最近の多様かつ変化の激しい社会情勢に対応した実践的研究の要請に対しては、近代経済学には歴史分析と倫理的側面が希薄であるとの指摘もある。

本書は、労働価値説に依拠し弁証法的手法によって分析を進める社会経済学（いわゆるマルクス経済学）と、限界効用価値説に依拠し演繹的手法によって分析を進める新古典派経済学（いわゆる近代経済学）の双方を補完的に用いることで、交通サービスを質的かつ量的に考察するとともに、わが国でこれまでに実施されてきた交通政策について、その背後にある思想を公共性の観点から歴史的に辿ることで、交通の理論・歴史・政策を対象に体系性を持った交通学の構築を試みようとする意欲作である。

本書の構成は、序章「交通をいかに認識するのか」、第1部「現代交通の基礎理論」、第2部「わが国の交通政策史」となっており、まさに交通の経済理論・歴史・政策を網羅した1冊となっている。以下、本書の内容・特徴を紹介していく。

序章は、交通研究に用いられてきた経済学、すなわち古典派経済学、マルクス経済学、新古典派経済学に

ついて、その理論の特徴や方法論を学説史的に論じるとともに、本書の目的・意義を提示している。

第1部は、交通に関する基礎概念・経済学的な捉え方を紹介している。第1章「交通と交通論」と第2章「交通サービス」、第3章「交通サービス商品と交通資本」では、交通の定義・意義や特質・諸概念、交通産業の特徴等を紹介するとともに、商品としての交通サービス（いわゆる公共交通）の成立過程を資本主義経済の変容過程から概観している。ここでは特に交通サービスの価格（運賃）と価値について、交通労働の点からその交換価値（運賃）と使用価値（有用性）を明確化することを説く社会経済学と、そのような区別はなく、交通サービスの消費者の限界効用価値とその生産者の限界費用から運賃を求める新古典派経済学の議論を紹介する一方で、交通資本や交通労働の特徴について、社会経済学の剰余価値の概念を中心に議論を展開している。第4章「弾力性概念と交通市場」と第5章「交通サービス商品の運賃」は、新古典派経済学における交通サービスの需要・供給や交通市場に関する諸概念と、限界費用価格形成原理やラムゼイ運賃といった運賃理論、総括原価主義やインセンティブ規制等の実務的な運賃決定法が紹介されている。また、運賃決定に関する市場価格と労働価値説の部分的な整合性を評価するとともに、新古典派経済学における制度・公共性の構造分析の欠如に対して批判を加えている。

第2部は、日本における運輸事業の生成・発展過程について、交通政策史の観点からまとめられている。第6章「鉄道事業と小運送業の成立から展開」と第7章「近代海運事業の成立と発展」、第8章「鉄道国有化政策の意義と諸効果」、第9章「戦間期の交通事業」

では、明治以降の資本主義経済体制が確立していく過程の中で、運輸事業の在り方に対する政府の考え方と、交通ネットワーク整備施策の変遷について、当初の国家主導型整備から民間活力の導入・保護政策を経て、事業者に対する規制・政府権限の強化へと展開していった様相とその背景が解説されている。第10章「交通市場の変容と交通政策」では、第二次世界大戦後の運輸事業の状況について、占領体制下・復興期の事業者再編・補助政策から高度経済成長期の総合交通体系、その後の規制緩和に至る運輸制度・政策の変遷の中で詳細に論じられている。

本書は、マルクス経済学をバックボーンとする（と思われる）著者の交通論講義がベースとなっている。そのためだろうか、「社会経済学と新古典派経済学の協働によって、すなわち質と量の両面から交通の基礎的原理を論じていく」とされながらも、全体を通して、やや一方的に新古典派経済学の効用価値説や方法論に基づく交通分析に対して批判を加えていくといった構成になっているように思える。また、「私的交通と公共性の領域も交通研究に際しては認識対象として必須である」と指摘してはいるものの、近年深刻化している道路混雑や自動車による環境汚染といった問題に対する議論がほとんど盛り込まれていないことは残念である。

しかしながら、「先達の学問的遺産を正しく継承する学びの過程が必須」であるといった著者の研究姿勢を反映して、交通研究の学説史に多くのページが割かれていることや、その理論の背景にある思想・歴史を明確に捉え、交通現象の本質的構造から政策を見るといふ本書の立場には、近代経済学をベースに交通を研究する者としても、大いに感銘を受けた。広く学説を紹介しているといった点ではこれから交通を学ばんとする学生に対して、また経済現象の構造・本質を明確化するという点では様々な学派の研究者に対して、本書は強く推薦したい良書である。